

学習する学校

教師の仕事について考えてみます。教師は、知っていることを子どもに教えることが仕事なのではないでしょうか。私は、教師は子どもにとって【学びのモデル】となるべき存在だと思っています。子どもにとって真に尊敬すべき先生とは、必ずしも子どもより多くのことを知っている人とは限らないはずです。

教師はその人自身もく学び手として未だ途上にある人>だと思っています。

自分が知らないということを自覚している人、知らないことを知りたいと願い、知ろうとする努力を粘り強く続けられる人が教師であるべきだと思っています。教師が自ら教材や未知の課題に向かう知的好奇心がやがて子どもにやる気を起こさせ、教師の情熱が子どもの想像力に火をつけるといえないでしょうか。子どもと一緒に学ぶことに教師自身も夢中になり、喜んだりするからこそ、その人は先生として尊敬され、その経験こそが大切にされるべきなのです。

教師自身にも問うべき問いがあり、共に問いかけることが教師と子どもを“平等な存在”にします。授業という営みにおいては、子どもも教師もその一部として生きているのです。

こうした考え方に立つと、学校という存在も、機械や道具として存在しているのではなく、【生きたシステム】として存在していると考えます。

私たちの身体はいうなれば川のようなもので、川岸がそこを流れる水を支配するように新たに流れる物質を取り込み、つねに絶えることなく新たに組織し直されるのです。

【生きたシステム】としての学校も、継続して成長し進化し続ける存在なのです。

大事なことは、子どもや教職員、保護者や地域の方たちが「この学校の目指す姿は何か？」「この学校がよりよく成長するために何が必要なのか？」を常に問い直すことが必要だと思っています。私たちはすべて学校というシステムの一部であり、学校に関わるすべての人たちが学び続けることによってのみ成長が保障されるのです。

私たち一人一人は、生きたシステムとしての学校の一部としてどのように振る舞うべきかを真剣に考えていく必要があります。この問いは、子どもや保護者を含めたすべての学校関係者に向けられるべき問いです。学校が【学び続ける組織】になることで、教師と子ども、子ども同士、教師と保護者などすべての関わりがお互いを排除しない開かれたものになり、それぞれが謙虚に学び合う姿勢こそが人と人とのつながりや信頼を回復していくと信じています。